「光と風と夢」と『VAILIMA LETTERS』：その創作部分にみる中島敦の批判精神と創作方法の変化

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2016-03-01 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 闔, 瑜 メールアドレス: 所属:
URL	https://otsuma.repo.nii.ac.jp/records/6185

This work is licensed under a Creative Commons Attribution-NonCommercial-ShareAlike 3.0 International License.

「光と風と夢」と『VAILIMA LETTERS』

――その創作部分にみる中島敦の批判精神と創作方法の変化――

閻　瑜

はじめに

「光と風と夢」は、サモアという南海の小島で生涯を終えたスティヴンスンの伝記といえる作品である。中島敦は一九四一年六月、喘息治療の目的も兼ね、国語教科書編修書記として南洋庁に赴任した。南洋へ赴く前に、南洋生活への憧憬と豊かな想像力で「光と風と夢」を書き上げ、原稿を深田久彌に預けた。のち、深田の推薦によって、翌年五月に『文学界』に掲載された[1]。中島が四二年三月に南洋庁から東京に戻った四ヶ月後、「山月記」や「光と風と夢」など七篇の作品を収録する最初の単行本は[2]『光と風と夢』（筑摩書房、一九四二年七月）という書名で刊行された。そして、小説「光と風と夢」は分量としては四百字詰め原稿用紙約三百枚もあり、中島の完成した作品のなかで最も長いものである。この小説はそれだけ彼の作家生活のなかで大きな存在であることが推測できよう。

博覧強記の中島が数多くの西洋文学者からスティヴンスンにたどりついたのは偶然ではない。朝鮮京城小・中学校時代（一九二〇～一九二六）には、すでに総督府図書館の洋書を読み耽っていた。そして、全集の年譜によると、一九三三年

ごろ「英文学を研究する」ことに集中していた。その中から、同じく肺病を患っているスティヴンスンに興味を持ち、さらにその行動と理念に共鳴を覚えるようになったと思われる。さらに、三九年夏、友人にスティヴンスンに関する本を貸してもらい、友人との談論ではスティヴンスンの全集、伝記や、『VAILIMA LETTERS』が話題に上がったという[3]。現存の中島の旧蔵書にスティヴンスンの著書が五冊ある[4]。そのうち、スティヴンスンがサモアからイギリスの友人に送った書簡集『VAILIMA LETTERS』がある。中島は主にこれらの書簡を自在に取捨選択し、変更を加え、スティヴンスンに感情移入して「光と風と夢」を書き上げ、自分のスティヴンスン像を作りあげたのである。

「光と風と夢」には、いくつかのテーマがあるように見える。スティヴンスンのサモアでの日常生活、文字についての悩み、健康の悪化、白人たちへの抵抗、サモアの紛争をなくすための奔走などが描かれている。したがって、「光と風と夢」は発表当時、主題が分裂していると指摘され[5]、評価を受けていなかった。その後、主人公が敵国である英国の植民地政策や西洋の近代主義を批判するところから、日本の植民地政策を謳歌するという時局性があると誤読されていた[6]。そして、時代との関連性についても議論が展開されている。荒正人氏は「サモア島の土民との交渉を描くことで、西欧の近代主義を批判し、文明を軽蔑し、原始の自然を讃美することができた。その結果、近代主義の側からの戦争批判からも自由であった。むろん、中島にそんな大それた政治的意図はない[7]」というように、「光と風と夢」の作者には「政治的意図はない」と主張している。後に、濱川勝彦氏はこの作品には「隠れた時代批判、政治批判が見られる[8]」と指摘しているが、具体的な分析は行われていない。斎藤一氏によると、西欧植民地への批判を所々散らばめることによって、「時局的」に見えることが中島敦の日本植民地政策への批判ではないかと推測している[9]。酒井優里氏は、「李陵」などの作品の「反戦思想」と結びつけ、作品中のスティヴンスンの白人批判を強調し、「光と風と夢」は主題が分裂しているように見えるが、「これらのすべては、反戦や反植民地思想を作品に織り込み、かつ検閲の目を逃れるための目くらまし」であり、「反戦色を薄めるために他ならない[10]」と主張している。ほかにも、山下真史氏によると、「光と風と夢」は戦争のなかで物語作家

は無用であるという結論を得ると同時に、中島が物語作家の夢を断念し、社会批判を秘めた文学を書こうとするターニング・ポイントとなった作品でもある。[11]

前述したように、「光と風と夢」はおもにスティヴンスンの書簡集『VAILIMA LETTERS』に基づいて書き上げた作品である。中島の創作部分に注目すると、サモアにおける白人の土民政策を批判し、土民のために奔走していた人道主義者スティヴンスンのほかに、創作方法について悩む作家としてのスティヴンスン像も際立っている。この創作部分に考察を加えることによって、作者の創作の意図を探り出すことが可能であろう。

横浜高等女学校の同僚で、英文学者の岩田一男氏は、「光と風と夢」と『VAILIMA LETTERS』との綿密な比較を行い、作品における書簡に対する取捨選択や中島の変更と創作の部分を明らかにした。[12] しかし、創作部分に焦点をしぼって、中島敦の作品創作の意図や時代意識を探求する作業は、これまでの研究では、まだ不十分ではないかと思われる。本稿では、先学の研究を踏まえ、スティヴンスンの書簡『VAILIMA LETTERS』と中島の作品「光と風と夢」との相違点に焦点をあて、これをその時代背景と結びつけ、作者の書簡・日記・手帳と照らし合わせ、彼の時代意識および創作方法の変化を追究したい。

一、「光と風と夢」と『VAILIMA LETTERS』との比較

作品は全部で二十章あり、日記形式の一人称と傍白の三人称が交互に綴られたスティヴンスンの南洋生活記である。岩田一男氏の先行研究[13]を踏まえ、「光と風と夢」を『VAILIMA LETTERS』と比較し、中島敦が創作した部分を分析した。「光と風と夢」における創作部分を通覧する時に、以下の三つの特徴に気づいたのである。第一、創作の分量からいうと、後半は前半と違い、創作の部分が大幅に増える。第二、創作の方法からいうと、初めは事実を尊重し、選択・配列・

結合という方法をとり、ほとんど想像をまじえず、物語を進めている。それに対し、後半になると、作者中島の感情移入がはげしくなるにつれ、原典を離れ、想像が多くを占めるようになる。第三、創作の内容からいうと、スティヴンスンに中島の感情を託し、西洋文明への批判と作品創作についての考えを述べる部分が圧倒的に多い。この部分、つまり文明批判と作家生活に関する部分を以下の表にまとめてみよう。

章	創作量	創作テーマ	創作内容
二	約二一二字	文明批判	野性的で逞しい南洋豚は「文明のために去勢」されたヨーロッパの豚と違う
六	約三四字	文明・白人当局批判	白人当局の囚人の扱い方に憤慨し、西洋文明が「破廉恥」で「野蛮」と批判
九	全章、約二七二九字	文学観、作家という自意識	スティヴンスン文学の本質、および彼の作家としての自覚
十	約三二三字	文学者としての自意識	マターファに精神的援助しか与えないことに対して文学者の不甲斐なさを感じる
十	約二〇八字	文明批判	シドニーのような「文明世界の大都市の中で窒息しそうだ」と騒音と機械の音に嫌悪を覚えると共に、サモアの緑を賛美
十一	約二五八一字	作家という自意識	第九章の敷衍。自分が物語作家であることを自覚
十二	約八四字	文学者としての自意識	戦争に対する文人の無力を嘆く
十六	約二一七三字	文学観	スティヴンスンの作品に対する批判、性格的・心理的小説およびゾラの写実主義に対する意見、「筋のない小説」についての考え、イギリスの下手な小説とフランスの巧い小説についての感想
十九	約一一一〇字	作家という自意識	スティヴンスンは自分の一生を嘲笑するが、自分の創作の技術に自信を持っている
十九	約二三九八字	文学観	告白的な小説を批判した後、自分の過去に自信がないため、そのような小説は書けない。これからも物語を書くことは生活の中心であると思う
十九	約五六九字	西洋文明批判	優越感を持つ「白人種の文学」と特別な基準を作りあげる「西欧文明」を批判
十九	約一八八八字	文明批判	文明社会を敵視するユニークな人物を五人も作りあげる

上記の創作部分以外に、原典どおりに記した後に、数行の説明・敷衍・抒情・比喩などを付け加える手法も用いられている。例えば、第八章の響いてくる笛の音についての描写、第十章のポリネシア紛争についての敷衍、第十二章の戦争に対する文人の無力さについての悲嘆、および第十四章においては、大勢の客を津波の襲来と喩えるなどの部分を挙げることができる。創作のほかに、第二十章のスティヴンスンの臨終・葬儀の場面のように、原典に基づき、想像を交えて書き換える方法もある。

中島敦の創作部分に注目すると、スティヴンスンを自分の分身として、西欧文明への敵視を表すと同時に、自分の作品創作や当時の文壇について評論する内容が特に多いことがわかる。これから、この二つのテーマに分けて考察を加えたい。

二、西洋文明への蔑視と日本植民地政策への批判

中島はスティヴンスンを通して、植民地における西欧文明の優越感や特殊な評価方法への蔑視を存分に表現している。まず、作中のスティヴンスンは南洋の自然の逞しさを賛美し、西洋の「文明」に対する蔑視と批判を述べている。例えば、喘息に悩み、健康回復のために南洋に行ったスティヴンスンは、美しい自然と肉体労働による爽快感を満喫し、野性に富んだ南洋の豚にも感心している。

> 欧羅巴（ヨーロッパ）の豚のやうな、文明のために去勢されて了つたものとは、全然違ふ。実に野生的で活力的で逞しく、美しいとさへ言つていゝかも知れぬ。

ほかに、スティヴンスンはサモア島を離れ、五週間ぐらいオークランドからシドニーに出かけた際、南洋の自然風景を思い出し、次のように叫び出す。

文明世界の大都市の中では窒息しさうだ。騒音の煩はしさ！　金属のぶつかり合ふ硬い機械の音の、いらだたしさ！

これは文明によって逞しさと美しさが失われてしまうことに対する批判、および大自然への憧憬と讃美ではなかろうか。次は、「白人文明を以て一の大なる偏見と看做し」、西洋の「文明」を皮肉り、激しく批判している。スティヴンスンは「白人種の文学」を自分の「縄張を設け、自分の嗜好を神聖なる規制の如きものに迄祭上げ」、「優越を誇つてゐるやうに見える」と感じている。文学にとどまらず、「西欧文明」は、ある「特殊な標準（めやす）」を作り上げ、それを「絶対普遍のもの」と信じ、すべての地域の人間や生活を評価しようとする。この評価法では、南洋の島民の「人格の美点」や「生活の良さ」が全く分からなくなる。

サモア島の島民は白人の政治政策に対する不満が高まり、頻繁に騒動を起こすようになる。白人当局はある「乱暴極まる措置」を思いつく。ダイナマイトを牢の下に仕掛け、襲撃を受けた場合、暴徒も囚人も共に爆破してしまうというものである。この事についての噂が広がってしまい、島民による反乱を恐れた政府は、突如囚人たちをほかの島へ移す。これに対して、スティヴンスンは大いに憤慨する。

大人しく服罪してゐる者を爆破しようといふのは勿論言語道断だが、勝手に禁錮を流罪に変更するのも随分目茶な話だ。斯うした卑劣と臆病と破廉恥とが、野蛮に臨む文明の典型的な姿態（すがた）である。

これらの箇所から、中島の分身であるスティヴンスンは、「白人種の文学」「西欧文明」が設けた「特殊な標準」と「野蛮的、偽善的」な「西欧文明」を徹底的に批判し、島民の素朴な美意識と人格を擁護する強い気持ちがうかがえる。

さらに、作中のスティヴンスンは南洋滞在中、文明社会を離れ、南洋をこよなく愛するユニークな五人に出会う。この五人は全て中島が作りあげた人物である。一人目は英国一流の大学を出ているが、「文明社会を故意に白眼視し」、「南海の風光、生活、気候、航海を愛」するため、南洋に残っているイギリス人、二人目はバアンズとシェイクスピアの二冊を友として南洋に住んでいるアメリカ人、三人目は島々で放浪生活を送り続けたスコットランド人、四人目はアペママの独裁者だった吟遊詩人、五人目は自国の衰亡を静かに諦観し、哲学者・社会学者のハアバアト・スペンサーを読み耽るハワイのカラカウア王。五人とも文明社会が重要視する利益や権利を軽視し、人生を諦観もしくは達観している人々である。この教養人達は文明社会の基準から外れた存在に見られるが、逆に彼らはこの態度を貫くことによって文明社会に抵抗する姿勢を示している。これは、まさに彼らを作りあげた作者中島敦の考えの表れといえよう。

「光と風と夢」以前の第一高等学校時代の習作からは、日本植民地政策への批判がうかがえる。例えば、「巡査の居る風景――一九二三年の一つのスケッチ――」と「D市七月叙景（一）」は、植民地としての朝鮮と満州の大連を描いているものであり、ここから中島の植民地制度への懐疑、支配者への批判と被支配者への同情を見出すことができる。「巡査の居る風景」と同時に掲載され、その時代批判を隠すため「毒消し」と中島自身に呼ばれている習作「蕨・竹・老人」においても、日本軍国主義への反感が記されている。これまであまり注目されていない中島敦の初期習作だが、勝又浩氏が指摘しているように、植民地時代を描いた日本の作家・作品全体のなかに置いてみれば、中島敦の植民地文学は、朝鮮と朝鮮人、満洲と満洲人民への理解が同時代のなかでは群を抜いているという面がある[14]といえよう。

「光と風と夢」の脱稿後、中島は南洋庁に赴任し、南洋諸島各地の公学校の視察に出かけ、日本植民地政策下の南洋土民の生活を見ることによって、土民たちに同情し、益々愛するようになる一方、植民地政策に対する不満と批判は募って

いく。彼は自分の感想を家族宛の書簡や日記に書き残している。数例を挙げてみよう。

一九四一年十二月二日付妻宛の書簡「この公学校の教育は、ずゐぶん、ハゲシイ（といふよりヒドイ）教育だ。まるで人間の子をあつかつてゐるとは思へない」という考えからも、南洋における植民地政策推進への軽蔑、当地の植民地教育政策への批判と土人への同情がはっきりと読みとれる。

同年十一月六日付で父田人に宛てた書簡には、「現下の時局では、土民教育など、殆ど問題にされてをらず、土民は労働者として、使ひつぶして差支へなしといふのが為政者の方針らしく見えます、之で、今迄多少は持つてゐた、此の仕事への熱意も、すつかり失せ果てました」と書いているように、明らかに教科書編纂と島民の教育政策への不満を洩らしている。

また、同年十二月十日付で長男桓に宛てた絵葉書には、南洋群島の植民地支配を代表する人物であり、「砂糖王」と呼ばれた松江春次の銅像については、「なんかどうでもいいのです」という言葉遣いには、松江春次と植民地支配への嫌悪と反発が込められていると考えられる。

そして、中島の一九四一年の手帳に残っている、南洋庁地方課における教科書編纂についての会議内容と見られるメモ、「奴隷的駆使に非ざる自発的労働力提供を目ざさんとす。その基礎としての道徳心養成」においては、彼の南洋の教育制度に対する不満を漏らしている。

さらに、四一年十二月八日の日記には、「島木健作の満洲紀行を読む、面白し。蓋し、彼は現代の良心なるか」と記している。『満洲紀行』（創元社、一九四〇年四月）は島木健作が満洲視察に出かけた時の見聞録である。実際に見聞したことが、満洲が夢の国であるという日本国内の宣伝と異なるため、満洲国植民地化政策に対する疑問と異議を覚えるようになったことが書きとめられている。中島の日記から、彼はこのような言論を発していることを「現代の良心」と賞賛していることがわかる。

南洋から戻った後、南洋生活に基づいて書き上げた「マリヤン」は、植民地政策の犠牲者といえるコロール島第一のインテリの土民女性について慨嘆している。「ナポレオン」は不良少年ナポレオンを通して為政者に対する不満さえ表している。[15] これらの作品から、日本植民地政策に対する不満と批判が読みとれる。その後、李陵、司馬遷、蘇武という三人の悲惨な運命が織り合わせられている「李陵」において、中島は日本の戦争中の状況を隠喩的に描いている。加えて、その後の「名人伝」においても、直接に日本植民地政策や戦争を批判しない「無為」によって、時局への最大の批判「為」を表し、「至為無為」つまり「不射之射」の方法で時代批判を行ったといえよう。つまり、中島は初期の習作に見られるような批判精神を捨てることなく、創作活動後期の「李陵」「名人伝」に至るまで、このような時代批判の精神が脈々とつながっている。[16] 山下氏の見方とは異なるが、「光と風と夢」は「社会批判を秘めた文学を書こうとするターニング・ポイントとなった作品」ではなく、その流れの中の一作といえよう。

「光と風と夢」が創作された一九四一年、および作品が『文学界』に掲載される一九四二年ごろの日本文壇においては、西洋人に西洋文明や植民地政策を批判させ、日本植民地主義とは違うとアピールすることを目的とした西洋作品の翻訳が数多く刊行されていた。これは戦争賛美とは違った意味において「時局的」だといえる。[17] 中島の分身であるスティヴンスンは、「文明」ではなく、「野蛮」、「破廉恥」的な西洋文明を強く批判し、サモア島における白人の植民地統治への不満を示している。中島の南洋滞在中の家族宛の書簡や日記と照らし合わせ、さらに第一高等学校時代の反植民地的な習作やその後の作品と併せて考察すると、「光と風と夢」は主人公スティヴンスンの西洋文明批判を通じて、中島の日本植民地政策への批判を表そうとする作品であるといえよう。

三、創作方法についての思考・作家という宿命

「光と風と夢」の『VAILIMA LETTERS』に対する創作部分のうち、分量からみると、物語作家スティヴンスンについての描写が最も多く、その内容は、中島自身の文学観や創作方法と作家としての自意識の二つに分類できる。

（一）創作方法の定着

「光と風と夢」においては、主人公スティヴンスンに中島自身の文学観を語らせている。

> 「筋の無い小説」といふ不思議なものに就いて考へて見たが、よく解らぬ。文壇から余りに久しく遠ざかつてゐたため、私には最早若い人達の言葉が理解できなくなつて了つたのだらうか。私一個にとつては、作品の「筋」乃至「話」は、脊椎動物に於ける脊椎の如きものとしか思はれない。「小説に於ける事件」への蔑視といふことは、子供が無理に大人つぽく見られようとする時に示す一つの擬態ではないのか？

自然主義系統の体験告白的私小説への嫌悪、芥川龍之介が主張していた「筋の無い小説」という文学観への批判であると同時に、小説とは何かについての思考ともいえよう。主人公スティヴンスンを代弁者としている中島は、真剣に小説の創作方法を考え、物語を重視し、その実践として「光と風と夢」を作成したと考えられる。

筋のないという表現は、芥川龍之介と谷崎潤一郎の間で行われた「小説の筋論争」[18]のことをさすと思われる。「筋の面白さ」や「構造的美観」を強調する谷崎の観点に対し、芥川は、小説の価値を決めるものは話の長短や奇抜さではなく、

「材料を生かす為の詩的精神の如何」と「詩的精神の深浅」が大切であり、「筋の無い小説」、「詩に近い小説」の純粋性を称賛した。さらに、谷崎の「文学に於いて最も構成的なものを小説とする」という意見に対して、芥川は「文芸的な、余りに文芸的な」において、「凡そ文学に於いて構造的美観を最も多量に持ち得るもの」は小説よりも寧ろ戯曲であらう」と述べている。五年後、中島敦は東京帝国大学国文科に提出した卒業論文『耽美派の研究』の「第四章　谷崎潤一郎論」の中で、「小説の筋論争」における両氏の発言を意識し、「私の考へによれば、文学に於いて最も構成的力量を必要とするものは、戯曲――劇――である」と書いている。中島は大学に在学中から、「小説の筋論争」に関心を示し、谷崎の論点に反駁するために生まれた芥川の「文芸的な、余りに文芸的な」を参考としていた可能性は十分にある。実際、大学卒業から二年経った頃は、芥川の「蜃気楼」「歯車」と同じような筋のない、あるいは「話」らしい話のない、自伝的小説「狼疾記」「かめれおん日記」を創作した[19]。

ところが、創作方法の模索期を経て「光と風と夢」を執筆する時期になると、小説創作についての考えが変わった。小説の「筋」は「脊椎動物に於ける脊椎の如きもの」で、中軸のような存在であり、「小説に於ける事件」を蔑視することは、「子供が無理に大人つぽく見られようとする時に示す一つの擬態」と見なしている。つまり、彼は小説における「筋」・「事件」の重要性を認識するようになったと思われる。

中島敦は初期習作の時期から創作方法を探り続け、悩んでいたようである。初期習作は耽美・写実・プロレタリア的な要素を備えているが、唯一の長編「北方行」は過度な自意識に縛られ、物語が展開できずに挫折してしまう。のちの自伝的小説「狼疾記」「かめれおん日記」は、形而上学的苦悩の泥沼に益々はまってしまい、物語性が全くないと言ってもいい。二年の沈黙後、中島は自分の思いを沙悟浄に託し、『わが西遊記』の中の一篇「悟浄歎異」を作成した。「悟浄歎異」は彼が始めて既成の素材に基づいて創作した作品である。その後の「光と風と夢」では、主人公スティヴンスンに創作方法についての認識を語らせているところから、中島は、小説とは何かと、真剣に小説の創作方法を考え、その実践として

「光と風と夢」を作成したと思われる。

その直後に書き上げた「山月記」や南洋から戻った後に創作した南洋物、および最後の「弟子」「李陵」「名人伝」などは、みな物語性を備え、事件の展開が見られるものになる。これは漢籍、南洋の伝説といった原典を下地にすることで実現できたと思われる。中島文学を通観する際、「筋」・「事件」を重要視するようになったという創作方法の変化は、彼の創作活動における大きな飛躍を遂げたと言ってもよかろう。

（二）作家という宿命

中島敦は「光と風と夢」のスティヴンスンに託し、作家になるという自分の宿命を強く意識していることを語っている。

> 満十五歳以後、書くことが彼の生活の中心であつた。自分は作家となるべく生れついてゐる、といふ信念は、何時、又、何処から生じたものか、自分でも解らなかつたが、兎に角十五六歳頃になると、既に、それ以外の職業に従つてゐる将来の自分を想像して見ることが不可能な迄になつてゐた。（中略）病気が行為への希求を絶つて以来、人生とは、私にとつて、文学でしかなくなつた。文学を創ること。（中略）私は蚕であつた。蚕が、自らの幸、不幸に拘はらず、繭を結ばずにゐられないやうに、私は、言葉の糸を以て物語の繭を結んだだけのことだ。（中略）俺は、物語を書くことしか今まで考へたことが無かつた。

実際に、中島の二五歳頃書いたメモ「断片九」[20]から、小説や詩を書き、作家になりたい強い願望、およびその才能がないのではないかという焦燥がうかがえる。また、一九三三年頃から書き継がれていた未定稿作品「北方行」において、中島の分身の一人といえる黒木三造は「自分は作家となるやうに生れついてゐる。誰が何といはうと、それは定まつてゐる

のだ」と宿命的に考えている。ここからも、自分が生まれながらの作家であるという中島の自意識がうかがえよう。

南洋に滞在した時、原稿用紙を持参し、本来何か書こうとしたが、あまりの暑さと体調不良で、何も書かずに、時間を無駄にすることを悔しく思い、自分の志すことに専念できないことを口惜しく思う気持ちを妻タカ宛の書簡（一九四一年十一月九日と同年十二月二日）に綴っている。

残念なことに、中島敦は作家として活動した期間は余りに短かった。一九四二年二月号の『文学界』に「古譚」二篇（「山月記」「文字禍」）を発表してから、同年十二月四日に亡くなった時までのわずか十ヶ月の間である。しかも、主な作品は「山月記」「光と風と夢」以外、ほとんどは一九四二年三月に南洋から帰った後に書き上げたものである。創作集『光と風と夢』と第二作品集『南島譚』の出版契約が相次いで結ばれ、文名があがった中島はついに作家として生活していくことを決意したが、そのほぼ五ヶ月後の一九四二年十二月四日に、死の床で「書きたい、書きたい、書きたい」、「俺の頭の中のものを、みんな吐き出してしまいたい」[21]と夫人に涙をためて語った。

そのおよそ一ヶ月前、中島は喘息に苦しみながら、最後の作品であるエッセイ「章魚木の下で」を書き上げた。「章魚木の下で」において、「戦争」と「文学」は全く違うもので、「文学」が「戦争」に役立つものではない、という文学観を語ると同時に、戦時下において、文学作品に功利的に国策的色彩を施している時代便乗的な人々を批判している。さらに、「文学を高い所に置いてゐる」ために、その「代用品の存在を許したくな」く、「出来なければ出来ないで、ほんものの出来る迄待つほかは無い」と宣言している。文学の純粋性を守り、文学で戦争に協力しないという強い気持ちが読みとれる。

「戦争といふ環境のなかで、大部分の小説が文学であることを抛棄」[22]してしまった時代、戦争賛美のようなものを書けば、すぐに文名をあげることができるはずであった。しかし、「書きたい、書きたい」という強い意気込みを持ちながらも、国策的色彩を帯びた文学作品を書かない姿勢を貫き、最後まで文学の芸術性を守り、「ほんもの」が出来るまで待つことは、中島が作家としての良心と使命感を持っていることを裏付けているといえよう。

おわりに

本稿は「光と風と夢」における『VAILIMA LETTERS』からの創作部分に焦点を当て、時代背景と結びつけ、作者の書簡・日記・手帳と照らし合わせ、彼の時代意識および創作方法の変化を追究した。

その結果、中島敦はスティヴンスンに感情移入し、植民地制度に対して批判を行い、戦時中の作家としての使命感を表していると同時に、創作方法について悩み、「筋」・「事件」を重要視するようになり、創作方法の飛躍を得ることができたという結論にたどり着いた。

今回は、『VAILIMA LETTERS』を基に創作した部分のみについて分析を行った。ところが、『VAILIMA LETTERS』以外にも、ほかのスティヴンスンの評伝などからの創作部分もあるため、今後はそれらについての比較研究も課題にしたい。

注

（1）中島敦は一九四一年六月に国語教科書編修書記として南洋庁に赴任する直前、「光と風と夢」のほか、「山月記」や「文字禍」の原稿を深田久彌に預けた。いずれも深田の推薦によって、中島が南洋に滞在している間に、『文学界』への掲載が決まった。「山月記」と「文字禍」は翌年二月号に、「光と風と夢」は同年五月号に発表された。ただし、戦時下の紙の統制で、全二十章のうち、十、十一、十四、十六章の四章を省くことになった。

（2）中島敦は生前二つの単行本しか出版していない。二冊目の単行本『南島譚』は、彼が南洋から戻った後、南洋における見聞に基づいて執筆した作品を含めた十五篇の短篇を収録している。

（3）岩田一男「『光と風と夢』とVailima Letters」、『一橋大学研究年報・人文科学自然科学研究』一九五九年三月

（4）　中島敦の旧蔵書にはスティヴンスンの著書が五冊ある。それぞれは『VIRGINIBUS PUERISQUE FAMILIAR STUDIES OF MEN & BOOKS』、『STRANGE CASE OF DR. JEKYLL AND MR HYDE』、『THE MERRY MEN & OTHER TALES』、『MEMORIES AND FORTRAITS』、『VAILIMA LETTERS』である。

（5）　「光と風と夢」は第十五回芥川賞の候補作（計二十三篇）に選ばれ、石塚友二の「松風」とともに最終の候補作に残り、川端康成と室生犀星に賞賛されるものの、その年の芥川賞が該当作なしということで、受賞はできなかった。「光と風と夢」の主題が多岐にわたると多くの選考委員に指摘されている。ほかに、岩田一男氏は「生活、事件、作品と主題がいくつかに割れている」というまとまりのない小説だと指摘している（岩田一男「『光と風と夢』とVailima Letters」『一橋大学研究年報・人文科学自然科学研究』一九五九年三月）。

（6）　深田久彌の推薦で、「光と風と夢」を読んだ『文学界』編集者河上徹太郎は、「とにかくこんなにはつきりした人間像は珍しいし、舞台は面白いし、内容は時局的だし、イメーヂは豊富だし、僕はすつかり惚れ込んで、長さに構はず載せたいのだ」（「中島宛書簡」、『中島敦全集』第三巻、筑摩書房、二〇〇二年五月）と、この作品を絶賛していた。ところが、佐々木充氏は、スティヴンスンはもともと「国策に対して頑強に反抗する人物」であるため、「そういう主人公の登場する小説が、「時局的」であるはずがない」と、「河上は誤読している」（「昭和十七年　中島敦『光と風と夢』　丹羽文雄『海戦』」、『解釈と鑑賞』一九八三年八月）と述べている。

（7）　荒正人「中島敦論」（一九六一年四月文治堂書店刊『中島敦全集』補巻、月報「ツシタラ五」）、『中島敦全集』別巻（筑摩書房、二〇〇二年五月）に所収

（8）　濱川勝彦「中島敦「光と風と夢」の一側面――サモア紛争史の意味――」、『叙説』一九八六年三月

（9）　齋藤一「中島敦、スティヴンスンを読み破る」、『立命館言語文化研究』十四（一）、二〇〇二年五月

（10）　酒見優里「『光と風と夢』における中島敦の反戦思想」、『清泉語文』二〇一二年三月

（11）　山下正史「『光と風と夢』論」（『日本近代文学』第五四集、一九九六年五月）、山下正史『中島敦とその時代』（双文社出版、二〇〇九年十一月）に所収

（12）　注（3）岩田一男氏前掲論文

（13）　注（3）岩田一男氏前掲論文

（14）勝又浩「生誕１００年目の中島敦」、『大人読み「山月記」』（明治書院、二〇〇九年六月）に所収
（15）拙文「中島敦の南洋物にみられるその時代意識―「マリヤン」を中心に」（『大妻国文』第四十五号、二〇一四年三月）を参照
（16）拙著『新しい中島敦像』―その苦悩・遍歴・救済』（桜美林大学北東アジア総合研究所、二〇一一年三月）を参照
（17）注（9）齋藤一氏前掲論文
（18）一九二七年四月から七月にかけて、芥川龍之介は「文芸的な、余りに文芸的な」を『改造』に連載（芥川の死によって中断）し、同誌上に「饒舌録」を連載中の谷崎潤一郎と「小説の筋論争」を展開していた。
（19）注（16）拙著を参照
（20）「断片九」は創作年代不明ではあるが、なかに「二十五歳」と書いているため、一九三四年に書き残したものと推測できる。以下はその一部である。
「失業者、つまり文学をやりたいなぞと不量見を起してゐる男である。（略）彼は町を歩いてゐた。このころ彼は次第に自分の才能に対する詩人をなくして行つた。（略）次のやうな文句ができ上つてきた。それは詩ではなかつた。彼は、（小説をかきたいと思つてゐたけれど）詩なんぞ、かいたことがなかつた。（中略）私はもう廿五だ。私は何かにならねばならぬ。ところで、一体私に何ができる。」
（21）中島タカ「思い出すことなど」、『中島敦全集』別巻（筑摩書房、二〇〇二年五月）に所収
（22）荒正人氏が始めて中島敦の名を知ったのは一九四二年五月号の『文学界』に出た「光と風と夢」である。「戦争といふ環境のなかで、大部分の小説が文学であることを抛棄してゐたときなので、それは際立つて香気つよい印象を残した」という回想を書き残している。（荒正人「中島敦氏のこと」、「中島敦全集通信、第一号」、『中島敦研究』（筑摩書房、一九七八年十二月）に所収）。

※　中島敦の作品の本文の引用（傍点を含む）は全て『中島敦全集』（筑摩書房、二〇〇一年）による。ただし、旧字は全て新字に改めた。